

乙酉年

Handwritten notes in cursive script, likely a date or reference.

委也日曆

Handwritten notes in cursive script, possibly a signature or additional date.

丙

戌

大正四十七年十一月
小如三五六九

Handwritten notes in cursive script, possibly a signature or additional date.

戸名

生田

毎月十日

少田

此下

多田

小田

石田

寺田

此下

信田

此下

井田

此下

石谷

此下

石谷

此下

石谷

此下

石谷

此下

石谷

此下

石谷

此下

元日

舊春餅

神主

卯時登城

卯時登城

卯時登城

卯時登城

卯時登城

卯時登城

卯時登城

卯時登城

卯時登城

卯時登城

卯時登城

卯時登城

おのれはかたじけなく
おのれをいふも
おのれをいふも
おのれをいふも
おのれをいふも
おのれをいふも

おのれはかたじけなく
おのれをいふも
おのれをいふも
おのれをいふも
おのれをいふも
おのれをいふも

おのれはかたじけなく
おのれをいふも
おのれをいふも
おのれをいふも
おのれをいふも
おのれをいふも

平番六八歳の 高麗三の若者

海傍の山崎村の海傍にありける

中層よりさきうへに ほかおと海軍自軍

さきと 揚子江の海軍自軍

たの海軍自軍 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

海軍自軍の 友軍に なる

まのあしとて子と孫孫孫
細るまてとてとてと
まのあしとてとてと
まのあしとてとてと

二月

まのあしとてとてと
まのあしとてとてと

まのあしとてとてと
まのあしとてとてと

まのあしとてとてと
まのあしとてとてと

まのあしとてとてと
まのあしとてとてと

まのあしとてとてと
まのあしとてとてと

まのあしとてとてと
まのあしとてとてと

まのあしとてとてと
まのあしとてとてと

曹公也

曹公也

三三三

三三三

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

曹公也

しのりといひしれはる身成るはる
 のちししはるかたに勝りしはる。御
 御言はるはるなり。おのちし
 のちしはるはる。おのちしはるはる。おのちし
 のちしはるはる。おのちしはるはる。おのちし
 のちしはるはる。おのちしはるはる。おのちし
 のちしはるはる。おのちしはるはる。おのちし
 のちしはるはる。おのちしはるはる。おのちし
 のちしはるはる。おのちしはるはる。おのちし
 のちしはるはる。おのちしはるはる。おのちし

法字の山積抄方一書

兼合載在はる。但武指人持物
 右是志高百之月。積法字不量也
 何の件

寛永三年正月

西丸奉合

新舟勘解由下

兼合載在はる
 兼浪御書反

書書之起下はる

16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30

有知... 海平... 志摩... ちか... 十... 何... 七...

十... 十... 十... 十... 十... 十...

十... 十... 十... 十... 十... 十...

十... 十... 十... 十... 十... 十...

十... 十... 十... 十... 十... 十...

十... 十... 十... 十... 十... 十...

十... 十... 十... 十... 十... 十...

十... 十... 十... 十... 十... 十...

十... 十... 十... 十... 十... 十...

十... 十... 十... 十... 十... 十...

十... 十... 十... 十... 十... 十...

十... 十... 十... 十... 十... 十...

十... 十... 十... 十... 十... 十...

十... 十... 十... 十... 十... 十...

十... 十... 十... 十... 十... 十...

十... 十... 十... 十... 十... 十...

八十八行... 西... 音...

... 申... 申...

... 申...

... 申...

... 申...

... 申...

... 申...

... 申...

... 申...

... 申...

... 申...

... 申...

... 申...

... 申...

... 申...

... 申...

... 申...

... 申...

いふはしあはれなりし時
はるかにゆかりの光を
あつたに似たりとて
いふはしあはれなりし
はるかにゆかりの光を
あつたに似たりとて
いふはしあはれなりし
はるかにゆかりの光を
あつたに似たりとて

今朝のついでに
十日の月しは
村のついでに
まはるに
二月のついでに
まはるに

いふはしあはれなりし
はるかにゆかりの光を
あつたに似たりとて
いふはしあはれなりし
はるかにゆかりの光を
あつたに似たりとて
いふはしあはれなりし
はるかにゆかりの光を
あつたに似たりとて
いふはしあはれなりし
はるかにゆかりの光を
あつたに似たりとて

カキヤウノキニキヤウ

一

一ツキヨノミヤノミヤ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

カキヤウノキニキヤウ

ラロ
一系以名の中 比に年八も若入
い言て流くく 少く少少之を

四
第の流の神の果の石の石
おら多の流をそりし神を石の流
いらくありし

ラロ
ラロの流の神の果の石の石
いらくありし

ラロの流の神の果の石の石
いらくありし

ラロの流の神の果の石の石
いらくありし

ラロの流の神の果の石の石
いらくありし

ラロの流の神の果の石の石
いらくありし

ラロの流の神の果の石の石
いらくありし

ラロの流の神の果の石の石
いらくありし

ラロの流の神の果の石の石
いらくありし

ラロの流の神の果の石の石
いらくありし

ラロの流の神の果の石の石
いらくありし

ラロの流の神の果の石の石
いらくありし

ラロの流の神の果の石の石
いらくありし

ラロの流の神の果の石の石
いらくありし

十四の約交者又厚給
位中 一壽 天の

十の^上の^人王國世也

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

来江片研

元

一帯は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

世の中は^人の^心の^所に^在りて

其の旨を記すに
きりきりきりきり
きりきりきりきり
きりきりきりきり

十

この世は海と云ふは
利はあんなに
本心はわづらひ
ふれずと云ふは
ことごとく

四つと云ふは
七つと云ふは
八つと云ふは
九つと云ふは
十と云ふは

十と云ふは
十一と云ふは
十二と云ふは
十三と云ふは
十四と云ふは

十一

この世は海と云ふは
利はあんなに
本心はわづらひ
ふれずと云ふは
ことごとく

十二

この世は海と云ふは
利はあんなに
本心はわづらひ
ふれずと云ふは
ことごとく

あつちのころ

と悦ばしり年一止に在るや
向とまじふ正統とらふ交を
巧みなるを思ふ事や
まづいと水大極のこま
ついでに

才のよきを群の名をいそがしく
人なれとこれ位の子よ
此れととわぼの命や
きしし
お村のや
ついでに
一
ついでに

ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに

ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに

予に曰く海を越して

と云ふ所を北にくだりて六島の

の村を過るる所を北にくだりて

と云ふ所を北にくだりて

と云ふ所を北にくだりて

と云ふ所を北にくだりて

と云ふ所を北にくだりて

と云ふ所を北にくだりて

と云ふ所を北にくだりて

と云ふ所を北にくだりて

と云ふ所を北にくだりて

と云ふ所を北にくだりて

と云ふ所を北にくだりて

と云ふ所を北にくだりて

と云ふ所を北にくだりて

と云ふ所を北にくだりて

と云ふ所を北にくだりて

田嶋海と云ふは海と云ふことなるに
 源田とありて大なりと云ふこと
 是なる為福清の地なりといふ
 云々
 十三年九月廿
 田嶋海と云ふことなるに
 源田とありて大なりと云ふこと
 是なる為福清の地なりといふ
 云々
 十三年九月廿

田嶋海と云ふは海と云ふことなるに
 源田とありて大なりと云ふこと
 是なる為福清の地なりといふ
 云々
 十三年九月廿

まのしほのうづも月
一見開地しけ。非國のま
るあふしの上の浪面集も
流文傳ありれしは
中らるる財貨
大つるるあふのまのうづも
あふしの上の浪面集も
まのしほのうづも

まのしほのうづも
まのしほのうづも
まのしほのうづも

まのしほのうづも
まのしほのうづも
まのしほのうづも

まのしほのうづも
まのしほのうづも
まのしほのうづも

まのしほのうづも
まのしほのうづも
まのしほのうづも

まのしほのうづも
まのしほのうづも
まのしほのうづも

まのしほのうづも
まのしほのうづも
まのしほのうづも

まのしほのうづも
まのしほのうづも
まのしほのうづも

まのしほのうづも
まのしほのうづも
まのしほのうづも

丙辰

元日登城拜北平全西城湯
拜長安長子紀孝之并上之長孫高
少理之長孫知春、美、均宅以
信和

丙辰 同海沙地無事命之長孫

何向之長孫元并之長孫元并
相與及之、泉州望節之長孫元并
明年之秋檢校而後列海平

何向之長孫元并之長孫元并
明年之秋檢校而後列海平

何向之長孫元并之長孫元并
明年之秋檢校而後列海平

何向之長孫元并之長孫元并

何向之長孫元并之長孫元并
明年之秋檢校而後列海平

鳥の鳴き声

鳥の鳴き声

鳥の鳴き声の音は、
さかすかにきこえる。

鳥の鳴き声

鳥の鳴き声の音は、
さかすかにきこえる。

鳥の鳴き声

鳥の鳴き声の音は、
さかすかにきこえる。

鳥の鳴き声

鳥の鳴き声の音は、
さかすかにきこえる。

鳥の鳴き声

鳥の鳴き声の音は、
さかすかにきこえる。

鳥の鳴き声

鳥の鳴き声の音は、
さかすかにきこえる。

鳥の鳴き声

鳥の鳴き声の音は、
さかすかにきこえる。

鳥の鳴き声

鳥の鳴き声の音は、
さかすかにきこえる。

鳥の鳴き声

鳥の鳴き声の音は、
さかすかにきこえる。

鳥の鳴き声

鳥の鳴き声の音は、
さかすかにきこえる。

鳥の鳴き声

大いなる海船は、
いづれに、
伊成宗家の、
いづれに、

たのむ海軍の、
いづれに、

いづれに、
いづれに、

いづれに、
いづれに、

いづれに、
いづれに、

いづれに、
いづれに、

いづれに、
いづれに、

いづれに、
いづれに、

いづれに、
いづれに、

いづれに、
いづれに、

いづれに、
いづれに、

いづれに、
いづれに、

いづれに、
いづれに、

いづれに、
いづれに、

十百と海
十百と海 十百と海

とるの御年印也

十百と海 十百と海

かの中判

と次り海と 神元七月の月
のめとて多し けあもなま

十百と海 十百と海
とるの御年印也

十百と海 十百と海
とるの御年印也

十百と海 十百と海
とるの御年印也

十百と海 十百と海
とるの御年印也

加

十百と海 十百と海
とるの御年印也

十百と海 十百と海
とるの御年印也

十百と海 十百と海
とるの御年印也

十百と海 十百と海
とるの御年印也

十百と海 十百と海
とるの御年印也

十百と海 十百と海
とるの御年印也

十百と海 十百と海
とるの御年印也

十百と海 十百と海
とるの御年印也

十百と海 十百と海
とるの御年印也

十百と海 十百と海
とるの御年印也

三平のうたは
たふほのうた
梅の舟は
久世のうた
梅の舟は
書生は
自由は
三平は
三平は

のちのうたは
ゆめは
ゆめは
ゆめは
ゆめは

正徳のうた
丁酉のうた

後醍醐天皇のうた
街のうた
文選三十五卷
一冊は

十四のうた
又華のうた

あまのうた
あまのうた
あまのうた
あまのうた

八月
卯のうた
卯のうた

卯のうた
卯のうた
卯のうた
卯のうた

心通しちねくはねては
すまはるる

り手印のらね
北江有るる
工肥海甲しん
北江清甲しん
印のらね

清の字

是

要丸多合

行手印自由

命丸需名

北江有る中

印の

工肥海甲しん

命丸需名

北江清甲しん

大目人印来しねては
印のらね

まじり印及まじり
印のらね

印のらね

命丸需名

八月甲。

印の

工肥海甲しん

北江有る中

命丸需名

北江清甲しん

大目人印来しねては
印のらね

印の

工肥海甲しん

北江有る中

命丸需名

北江清甲しん

下。自からなるるち能くあるべき。しとあるあるのち、時時方々に

上。自からなるるち能くあるべき。しとあるあるのち、時時方々に

一二三四

江戸野馬音外、建安あり

上。自からなるるち能くあるべき。しとあるあるのち、時時方々に

上。自からなるるち能くあるべき。しとあるあるのち、時時方々に

上。自からなるるち能くあるべき。しとあるあるのち、時時方々に

上。自からなるるち能くあるべき。しとあるあるのち、時時方々に

上。自からなるるち能くあるべき。しとあるあるのち、時時方々に

上。自からなるるち能くあるべき。しとあるあるのち、時時方々に

上。自からなるるち能くあるべき。しとあるあるのち、時時方々に

上。自からなるるち能くあるべき。しとあるあるのち、時時方々に

上。自からなるるち能くあるべき。しとあるあるのち、時時方々に

上。自からなるるち能くあるべき。しとあるあるのち、時時方々に

上。自からなるるち能くあるべき。しとあるあるのち、時時方々に

上。自からなるるち能くあるべき。しとあるあるのち、時時方々に

上。自からなるるち能くあるべき。しとあるあるのち、時時方々に

三六
あ。しんを
あ。

九月

このく海の本更なるあはれを
つ。のちをたすむるにせむし

う。のちをたすむるにせむし
のちをたすむるにせむし
のちをたすむるにせむし
のちをたすむるにせむし

このく海の本更なるあはれを
つ。のちをたすむるにせむし

このく海の本更なるあはれを
つ。のちをたすむるにせむし

このく海の本更なるあはれを
つ。のちをたすむるにせむし

このく海の本更なるあはれを
つ。のちをたすむるにせむし

このく海の本更なるあはれを
つ。のちをたすむるにせむし

このく海の本更なるあはれを
つ。のちをたすむるにせむし

このく海の本更なるあはれを
つ。のちをたすむるにせむし

らるる海河の多岐なる
しるす相成るる事不圖
よりしるす事不圖

下りし海河の事不圖

甲子の如し事不圖

乙子の如し事不圖

丙子の如し事不圖

丁子の如し事不圖

戊子の如し事不圖

己子の如し事不圖

庚子の如し事不圖

辛子の如し事不圖

壬子の如し事不圖

癸子の如し事不圖

甲子の如し事不圖

乙子の如し事不圖

丙子の如し事不圖

丁子の如し事不圖

戊子の如し事不圖

己子の如し事不圖

大なる地土園をくもく生る其の如く
其の如く生る、くくくくくくくくくく
とくくくくくくくくくくくくくくく
近玉類、必執、兼、身、之、年、とくく

二月

三月 海、くくくくくくくくくく

くくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

四月 海、くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

あるものなるにんごの事の上
はあつていふ

可なりと海にのりていふ

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

あつていふことなり

の
と我

ありし海と

ありし海と

ありし海と

ありし海と

ありし海と

ありし海と

ありし海と

ありし海と

ありし海と

ありし海と

ありし海と 新田
澄彦 信 鏡 自 十 條
と

ありし海と

ありし海と

ありし海と

ありし海と

ありし海と

ありし海と

ありし海と

ありし海と

Handwritten text in black ink, likely a list or account, written in a cursive style. The text is arranged in approximately 12 vertical columns, reading from right to left. The characters are highly stylized and difficult to decipher precisely, but appear to be a form of shorthand or a specific dialect of Japanese or Chinese characters.

Handwritten text in red ink, consisting of several vertical columns. This text is more legible than the black text and appears to be a title or a specific section header, possibly indicating a date or a category.

The left page of the manuscript is mostly blank, showing signs of age, including yellowing, foxing, and some faint, illegible markings or bleed-through from the reverse side.

